


今治の老舗タオルメーカー・今井タオルへ入社

藤原タオルが廃業したのち、藤原直美氏は、1年ほどタオルとは別の仕事に就いていたが、2012年12月に今井タオル（株）に縫製（ヘム縫い）担当として入社した。タオルの縫製加工に本格的に携わるのはこれが初めてだった。

地元の求人情報誌「イエローガイド」を何気なくみていたら、今井タオルが縫製技術者を募集しており、自宅が今井タオルの工場から近いこともあって応募してみた。「ミシンは大嫌いだったんですよ。実家のタオル工場でおばちゃんたちがミシンを使ってヘム縫いをしているところをよくみてきたんですけど、肩は凝りそうだし、細かい作業でたいへんそうだし、ミシンだけは仕事にしたくないとおもってたんですよ。だけど、どう言えばいいのか、やってしまいましたね。」

今井タオルでは、ちょうどタオル縫製を担う人材が不足していた。藤原氏は、タオルづくりの現場を知る経験者であり、徒歩圏内に自宅があり、さらにさまざまな資格保持者であり、今井タオルにとって最適な人材であった。藤原氏は、普通自動車一種免許をはじめ、硬筆書写技能検定2級、4級小型船舶操縦士免許、日商簿記3級、いまばり博士検定中級、タオルソムリエ資格検定をもっている。タオルの配送はできるし、自筆の礼状も書けるし、一般的な経理の仕事もできるし、今治のことはおおよそ頭に入っているし、何よりタオルのことを理解している。


タオルケットの祖、今井タオル

今井タオルでの採用が決まり、藤原氏はタオルの縫製技術者としてのキャリアをスタートさせた。ここで今井タオルについて言及しておくのと、今井タオル（株）の歴史は古く、1899年に今井佐太郎  が現在の今治市波方町に小幅の縞木綿を生産する今井佐太郎工場を

創業したときに遡る。

今治では、小幅木綿、綿ネル、広幅木綿、タオルという具合に時代のニーズに合わせて柔軟に製品を変え、綿織物産地として歴史を重ねてきた。今井タオルは、この今井佐太郎工場を前身にもち、1918年に村秀式タオル織機を導入してタオル生産を開始した。1928～30年頃になると、フェイスタオル（浴巾）が工場の主力品となっていたが、寝巻地などの反物も製織していた。反物のなかには女子用腰巻のクロスもあり、5、6月頃の田植えの時期に需要があった（越智進[1990]26頁）。

今井佐太郎工場では、1929～1930年頃にのちに大流行となる新たな製品が生まれた。それが「タオル掛布団」、つまりタオルケットである。今井佐太郎工場と取引のあった名古屋の武井寝具店が、反物の需要が落ち込む夏のシーズンに何かほかに需要を喚起できる製品はないかということで、今井佐太郎工場へタオル地で夏用の掛け布団を作ってはどうかと打診したのが、タオルケット誕生の経緯である（越智進[1990]28頁）。

1930～1933年には今井佐太郎工場生産するタオルの3割程度をビルマ（現・ミャンマー）やインド、アメリカなどへ輸出した。海外では大判タオルが人気であり、工場ではバスタオルに「蛇腹」というブランド名を施し、大阪の野村作蔵商店を介して海外市場を開拓した。この間、1932年に工場のすべての織機を鉄製のものに置換し生産性を高めていったが、その翌年から1935年までタオル不況に陥り、工場は他の綿布会社の賃織りとして満州向けの綿布を生産し利益を上げた。そのため、機械設備の一部を再整備し、とくにゼファー生地  を生産するために従来の村秀式ドビー織機を名古屋ドビー織機に取り替え、不測事態に対応した（越智進[1990]）。

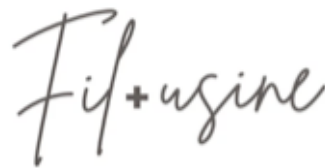
1943年、今井佐太郎工場は、1942年5月公布の「企業整備令」（1945年10月廃止）によって中小企業の強引な統廃合が進められたが、工場は優良企業としてその対象にはならず、今井タオルに名称を変えて存続した。幸運なことに、今井タオルは市街地から離

れており、1945年の3度にわたる今治空襲の被害を受けなかったため、戦後は織機63台をもって今井タオル工場としてすぐに再スタートを切ることができた（阿部克行[2006]2頁）。

戦後復興のなか、今井タオルは、「大格子ケット調」のタオルケットを生産し、タオルケット・ブームを牽引した。1951年、事業拡張にともない株式会社に改組し、今井タオル（株）となった。その後もタオルづくりに邁進し、1958年～1966年にかけて毎年全日本タオル振興展にバスタオルを出品し、通商産業大臣賞3回、中小企業長官賞2回、繊維局長賞3回受賞した。

1960年は生産高で今治タオルが泉州タオルを初めて抜いた年であるが、今井タオルでは受注量の増加にあわせて工場を増築し、時代の潮流に乗って内需を中心に生産量を順調に増やしていった。今井タオルでは、ドビーとジャカードの両織機を駆使して、フェイスタオルやバスタオル（輸出用も含む）、反物、タオルケットなどを生産し、また1960～1961年には「ラッキー印」のタオル製品を東京や大阪、名古屋の首都圏の間屋に卸し、好評を得た（越智進[1990]9頁）。

1990年以降はタオル不況となり、今井タオルもその影響を受けるが、2003年に今井秀樹氏が代表取締役社長に就任した翌年の2004年に新たな自社ブランド「フィルユーザーヌ fil+usine®」を立ち上げ、同時に自社の情報発信基地として東京都渋谷区富ヶ谷

The logo for Fil+usine is written in a cursive, handwritten style. The word 'Fil' is in a larger, more prominent script, followed by a plus sign and the word 'usine' in a similar but slightly smaller script.

出典：今井タオル HP より引用

に「fil+usine」を開店した。同店は、2014年に東京都目黒区目黒に移転後、2018年に再び「fil+usine 富ヶ谷店」となり現在に至っている。「fil+usine®」は、同社によると、フランス語で「糸の工場」という意味があり、「地域に脈々と育まれてきた確かな技術・経験に裏打ちされた品質と温もりに満ちたタオルブランド」である。

日本のタオル工業全体が勢いを失っていくなかで、今井タオルの

攻めの姿勢はその後もつづき、2007年にJR東日本立川駅に「エキュート立川店」、2016年に東京駅グランスタ内に「fil+usine グランスタ店」、2017年に調布駅に隣接する調布パルコに「fil+usine 調布パルコ店」をそれぞれ開店させ、2018年には渋谷区代々木に東京オフィスを開設した。2019年は今井タオル創業120周年を迎え、2023年には「fil+usine®」に加え、新しい自社ブランドの「ORI365」を立ち上げている。



fil+usine®には、ワッフルタオル（左）やオーガニックパイル（右）などさまざまなシリーズがあり、糸の種類や織の技術、デザインなどによってバリエーションも豊富

（出典：今井タオル HP より引用）

今井タオルの動力ミシン主任として

藤原氏の今井タオルでのキャリアについては、入社後ほぼ1年間を助走段階として、2年目から縫製のスピードも向上し一人前の技術者に成長した。「入社当初は動力ミシンを使って本格的にヘム縫いをするのは初めてでしたので、最初は怖かったですね。1年目くらいで慣れてきました。」そして、5年目からは今井タオルの「動力ミ

シン」部門の主任として後進の指導も兼ねるようになった。

ヘム縫いの指導は、日本人のみならず海外からの研修生にも向けられている。ここ10年では中国やベトナムからの研修生が多く、最初はジェスチャーを交えながらコミュニケーションをとることもあるが、かれらの多くが来日前に日本語を学んでくるため、言葉の壁や言葉によるトラブルはほぼない。また、来日した研修生のほとんどは、真面目で一生懸命に仕事に打ち込んでくれる。研修生はいずれ母国に帰るため、藤原氏は教え子との出会いにおいて一期一会を大切にしている。

ヘム縫いの工程に入るまえにB級品は検査によってとり除かれるため、ヘム縫い工程での失敗は皆無に等しい。つまり、100%に近い確率で、仕上工程の最終段階であるヘム縫い加工はおこなわれている。

2012年12月の入社から12年以上もの間、藤原氏が今井タオルで縫製をつづけている理由は、今井

タオルでの居心地の良さにくわえ、ひとえにタオルが好きだからである。タオルはデザイン性に富む製品である。この12年の間でもタオルの多様化には目を見張るものがあり、藤原氏にとってタオルはファ



今井タオルの工場外観

ッションの一部なのである。毎年、デザインや素材の違いによって何通りもの製品が生み出されている。タオルづくりの一端を担っている藤原氏は、入社から10年以上経ったいまも新鮮な気持ちでタ

オルと向き合っている。「いろんな種類のタオルを縫製できるのが結構楽しいんですよ。色はもちろん、肌触りとか、厚みとか、すべて違いますね。この10年ほどの間に随分タオルも変わりましたね。いまは使う糸もバリエーションがありますね。」

今井タオルが自社ブランドに積極的にとり組み、流通面ではインターネットを介した通信販売や直営店での対面販売をとおして消費者と直接に繋がっているという強みが、製品のバリエーションをより豊かにさせている。下請生産に徹していた藤原タオルと比較すると、藤原氏はその規模に感心する。



今井タオル本社（波方町）のショールームにはさまざまなタオルが展示されている

バリエーション豊かなタオルのひとつ一つに丁寧な仕事が施されている



髪の毛が落ちないように不織布
の帽子を被って作業する

丁寧かつスピーディに一枚一枚
のタオルに縫製加工を施す

（次号につづく）

